

水越遺跡・太田川遺跡

-寝屋川流域下水道 枚岡河内南幹線（二）下水管渠築造工事に伴う発掘調査-

平成28年11月

大阪府教育委員会

水越遺跡・太田川遺跡

-寝屋川流域下水道 枚岡河内南幹線（二）下水管渠築造工事に伴う発掘調査-

大阪府教育委員会

序 文

大阪府の中部、中河内の地域は、河内湖やその痕跡である深野池、新開池などの水域に旧大和川水系の諸河川が流入する低地部と、大和との境を画する生駒山地の西麓の地域で構成されています。そして生駒山地も北から飯盛山、生駒山、高安山と連なり、それぞれその麓に個性的な歴史と文化が形成されています。

今回、発掘調査を実施した八尾市所在の水越遺跡、太田川遺跡は高安山の麓に広がり、繩文時代以来連綿と続く歴史を秘めています。遺跡は、山裾から扇状地、さらに平野部にまで広がっており、地点ごとに性格の異なる遺構が分布しています。発掘調査は扇状地の先端を南北に走る東高野街道に隣接する地点で実施しました。二地点とも扇状地に刻まれた谷地形にあたっており、主に農業生産にかかわる遺構が検出されました。この地に生活を営んだ人々の土地利用の歩みを把握することができました。

調査は下水道幹線の建設にともなうもので、工事実施や完成後の管理のための立坑の建設地点にあたり、それぞれ50~70mほどの小規模なものでしたが、多くの成果を上げることができました。この成果が地域の歴史を復元するための資料として広く活用されることを希望します。

調査にあたっては大阪府都市整備部東部流域下水道事務所、八尾市教育委員会、公益財團法人八尾市文化財調査研究会はじめとする諸機関、諸氏の協力を得ました。文末ながら厚くお礼申しあげます。

また、今後とも本府の文化財保護行政にご理解とご協力をいただきますようお願いいたします。

平成28年11月

大阪府教育庁文化財保護課長

星住 哲二

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて平成27年度に実施した、寝屋川流域下水道 枚岡河内南幹線（二）下水管渠築造工事に伴う、八尾市服部川一丁目所在の水越遺跡、同市大竹一丁目所在の太田川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、平成27年度に文化財保護課調査事業グループ課長補佐 橋本高明の指導の下、同主査 岡田 賢、専門員 広瀬雅信・小林義孝を担当者として実施した。
3. 遺物整理作業は、平成28年度に同課調査管理グループ総括主査 小浜 成、同副主査 藤田道子、専門員 阪田育功を担当者として実施した。
4. 本調査の調査番号は、15011（太田川遺跡）、15012（水越遺跡）である。
5. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
6. 本書の執筆は第1章、第2章を岡田が、他を小林が行った。
7. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。また出土品のうち木製品については、一般社団法人文化財科学研究所に保存処理を委託した。
8. 本書は、300部を作成し、一部あたりの単価は584円である。

凡　　例

1. 調査にあたっては、国土座標第VI系を用いた。遺構平面図には、座標値をX Y軸について示した。
2. 標高は、すべてT.P.（東京湾平均海面）値を使用した。
3. 遺構番号は、検出順に番号を付した。
4. 本書掲載の遺物は、本文挿図・図版写真とともに共通した通し番号を付している。

目 次

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 太田川遺跡と水越遺跡における既往の調査	5
第3章 水越遺跡の調査成果	11
第1節 基本層序と遺構面	11
第2節 検出された遺構	12
第3節 出土した遺物	14
第4章 太田川遺跡の調査成果	18
第1節 調査区の立地と堆積土層	18
第2節 検出された遺構	18
第3節 出土した遺物	19
第5章 まとめ	21

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 調査地周辺の遺跡分布図	3
第3図 太田川遺跡・水越遺跡における既往の調査地	6
第4図 旧大阪府立清友高等学校における調査区平面図	7
第5図 調査区断面図	11
第6図 水田跡平面図	12
第7図 水田畦畔断面図	13
第8図 溝4（弥生時代）平面図	14
第9図 溝4断面図断面図	14
第10図 繩文晩期土器実測図（1）	15
第11図 繩文晩期土器実測図（2）	16
第12図 その他の土器実測図	17
第13図 調査区断面図	18
第14図 遺構面平面図	19

第15図	溝断面図	19
第16図	須恵器甕実測図	20
第17図	確認トレンチ断面図（2）	20

図版目次

図版表紙 矢柄（水越遺跡出土）

図版1 水越遺跡検出遺構1

図版2 水越遺跡検出遺構2

図版3 水越遺跡検出遺構3

図版4 水越遺跡出土遺物1

図版5 水越遺跡出土遺物2

図版6 太田川遺跡検出遺構1

図版7 太田川遺跡検出遺構2

図版8 太田川遺跡出土遺物

第1章 調査に至る経過

今回実施した発掘調査は、大阪府都市整備部東部流域下水道事務所が実施する、寝屋川流域下水道事業に伴うものである。

本事業のうち、枚岡河内南幹線（二）（第2工区）下水管渠築造工事、および枚岡河内南幹線（二）（第3工区）下水管渠築造工事の施工箇所が、それぞれ周知の埋蔵文化財保蔵地の水越遺跡、太田川遺跡に該当することから、東部流域下水道事業所と大阪府教育委員会事務局（現：大阪府教育庁）はその取扱いについて協議を行い、両工事ともに発進立坑の築造に際して本発掘調査を実施することとした。調査地は水越遺跡が八尾市服部川一丁目、太田川遺跡が同市大竹一丁目である（第1図）。

太田川遺跡の発掘調査（調査番号15011）は、平成27年10月1日に着手し、同年11月30日に終了した。調査面積は52m²である。

水越遺跡の発掘調査（調査番号15012）は、平成28年1月12日に着手し、同年2月29日に終了した。調査面積は66m²である。

調査は立坑築造のための鋼矢板、および道路覆工板を設置後、盛土、旧耕土についてはバックホウによって除去し、それ以下の堆積層について人力により1層ごとに掘り下げ、堆積層の状況、遺構、遺物の有無等を確認しながら記録保存調査を実施した。



第1図 調査地の位置図 (1/25,000)
(国土地理院発行二万五千分の一地形図「大阪東南部」「信貴山」より作成)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

太田川遺跡および水越遺跡は八尾市の東部から東北部にかけて所在し、生駒山地の西麓に発達する扇状地から沖積低地部にかけて展開する遺跡である。扇状地においては、箕後川、楽音寺川、太田川、水越川、千塚川、山畑川などの河川が西流して恩智川に接続している。

現在の地形分類図では、これらの河川によって形成された小規模な自然堤防が、東西方向に幾筋か存在することがわかる。また低地部への扇状地の張り出しへは、概ね近鉄信貴線より北側は国道170号線（大阪外環状線）まで認められ、南側は国道170号線と旧国道170号線（東高野街道）との間まで認められる。扇状地西側の低地部は、玉串川の自然堤防との間に形成された後背湿地となっている。

調査地点は、太田川遺跡については扇状地内に位置しており、また水越遺跡については扇状地端部の谷部から小河川によって東西方向に形成された狭小な自然堤防から谷部にかけて位置している。

両遺跡の北西に位置する、池島・福万寺遺跡における発掘調査では、遺跡の形成過程に関する微地形の分析が行われている（河角1998、井上2002）。これらによると、池島・福万寺遺跡東部に展開する扇状地（扇状地帯V）は、生駒山西麓を流下する河川によって形成された自然堤防の一部で、古墳時代以降に形成されたとされている。今回の調査地のうち、水越遺跡で確認された古墳時代の水田面を覆う厚い砂層は、古墳時代後期以降に堆積したものであり、また平田川によって形成された自然堤防を構成する堆積層であるとみられる。上記の扇状地（扇状地帯V）から南東に約2km離れた地点ではあるが、生駒山西麓に発達する扇状地帯の形成時期の1つを示す事例であるといえよう。

第2節 歴史的環境

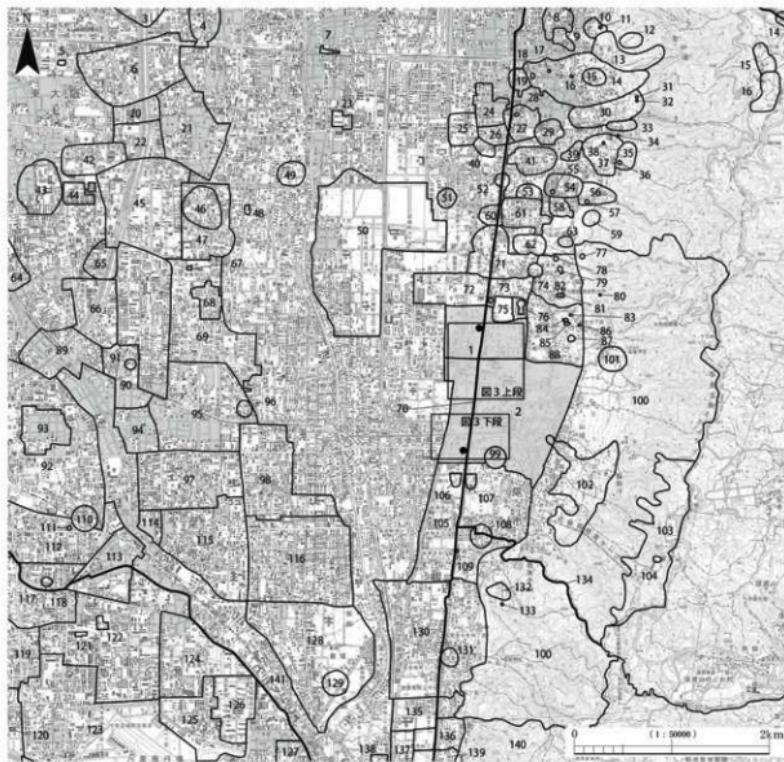
本節では太田川遺跡・水越遺跡周辺の遺跡のあり方について概観しておく（第2図）。

後期旧石器時代では、生駒西麓の低位段丘面扇状地帯に立地する千住寺遺跡、山畑遺跡、正興寺遺跡で、ナイフ形石器や縦長剥片が採取されている。

縄文時代では、早期の神並遺跡、前期～後期の恩智遺跡、中期～後期の日下遺跡、鬼塚遺跡、縄手遺跡などが認められる。いずれも扇状地上に立地する遺跡である。水越遺跡においても中期末～後期中葉頃の遺構、遺物が確認されている。低地部では池島・福万寺遺跡で中期～後期の土器片が出土しているが居住を示すような遺構は検出されていない。晩期になると確認される遺跡は増加し、扇状地上には馬場川遺跡、鬼塚遺跡、恩智遺跡などが認められる。晩期後半には低地部の鬼虎川遺跡、水走遺跡、池島・福万寺遺跡で遺構、遺物が認められる。

弥生時代前期には前葉に若江北遺跡、前期中葉には山賀遺跡、美園遺跡、跡部遺跡、中田遺跡など、長瀬川流域の微高地に集落が展開するほか、大竹西遺跡や水越遺跡でも前期から中期にかけて集落を形成していたとみられる。また池島・福万寺遺跡では当該期の水田が広範囲にわたり検出されている。

弥生時代中期には、集落数が急増し、生駒山西麓では鬼虎川遺跡、水越遺跡、恩智川遺跡が、長瀬川・



- 1 : 本太川遺跡 2 : 水越遺跡 3 : 西岩田遺跡 4 : 岩田遺跡 5 : 舟竹遺跡 6 : 瓜生堂遺跡 7 : 花畠敷遺跡 8 : 盆池遺跡
 9 : 河内寺跡 10 : 水走寺跡 11 : 五条古墳 12 : 五条山古墳群 13 : 長谷寺跡 14 : 山畠古墳群 15 : 山畠50号墳
 17 : 山畠51号墳 18 : 山畠52号墳 19 : 市尻遺跡 20 : 日摩摩寺跡 21 : 若江遺跡 22 : 若江北遺跡 23 : 花園遺跡 24 : 五合田遺跡
 25 : 北島池道跡 26 : 土上道跡 27 : 繩手道跡 28 : 元の木塚古墳 29 : 上六方寺道跡 30 : 花草山古墳群 31 : 花草山15号墳 32 : 紋塚古墳
 33 : 五里山古墳群 34 : 高塚古墳 35 : 往生院金堂跡 36 : 楠木正行墓 37 : 沼山山道跡 38 : 二本松古墳 39 : 桜井塚古墳
 40 : 六万寺遺跡 41 : 船山遺跡 42 : 小坂江遺跡 43 : 小若江遺跡 44 : 新小坂遺跡 45 : 山塙遺跡 46 : 西郡廢寺 47 : 西郡遺跡
 48 : 高砂町遺跡 49 : 玉串遺跡 50 : 池島・福原土寺遺跡 51 : 池島東遺跡 52 : コモ田遺跡 53 : 北尾敷遺跡 54 : 平掌遺跡
 55 : 大賀世1号墳 56 : 津土寺古墳群 57 : 常光寺古墳 58 : 貝花遺跡 59 : 津土寺跡 60 : 西代遺跡 61 : 馬場川遺跡 62 : 西の口遺跡
 63 : 萩山古墳 64 : 斧形遺跡 65 : 友井東遺跡 66 : 美園遺跡 67 : 葦原1号墳 68 : 葦原寺内町 69 : 葦原遺跡 70 : 東高野街道
 71 : 美音寺道跡 72 : 大竹西遺跡 73 : 鎌塚古墳 74 : 心合寺山古墳 77 : 繩山古墳 78 : 究山古墳
 79 : 西の山古墳 80 : 中谷山古墳 81 : 花岡山古墳 82 : 花岡山遺跡 83 : 向山2号墳 84 : 向山1号墳 85 : 向山瓦窯跡 86 : 双子塚古墳
 87 : 安雲古墳 88 : 大竹道跡 89 : 佐堂遺跡 90 : 宮町遺跡 91 : 久宝寺寺内町 94 : 八尾寺内町
 95 : 東郷遺跡 96 : 東郷麻守寺跡 97 : 成法寺遺跡 98 : 小阪合遺跡 99 : 高麗寺跡 100 : 高安千塚古墳群
 103 : 高安城跡 104 : 高安山古墳群 105 : 鶴川遺跡 106 : 郡川西保古墳 107 : 郡川東保古墳 108 : 敦興寺跡 109 : 堀内村一里塚
 110 : 渋川廢寺 111 : 路部御跡出土群 112 : 路部道跡 113 : 植松道跡 114 : 鶴畢業跡 115 : 矢作遺跡 116 : 中田遺跡 117 : 太子堂遺跡
 118 : 勝多寺跡 119 : 長原道跡 120 : 八尾市遺跡 121 : 北木の本二丁目遺跡 122 : 植松南遺跡 123 : 木の本道跡 124 : 老原遺跡
 125 : 田井中遺跡 126 : 志紀遺跡 127 : 弓削道跡 128 : 東弓削道跡 129 : 弓削寺跡 130 : 恩智遺跡 131 : 恩智城跡 132 : 岩戸古墳群
 133 : 信貴蘿蔴古墳 134 : 信貴輪 135 : 神宮寺遺跡 136 : 山ノ井遺跡 137 : 大県郡条里遺跡 138 : 法善寺廢寺 139 : 平野道跡
 140 : 平尾山古墳群 141 : 奈良街道

第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (1/50,000 ●: 調査地点)
 (国土地理院発行二万五千分の一地形図「大阪東南部」「信貴山」より作成)

楠根川流域では瓜生堂遺跡、亀井遺跡が展開する。池島・福万寺遺跡でも当該期の集落と水田が検出されている。

弥生時代後期には、生駒西麓の山畠遺跡、岩滝山遺跡などの高地性集落が認められ、水越遺跡などの扇状地に立地する遺跡でも遺構、遺物が認められる遺跡が増加する。また池島・福万寺遺跡では前時期に引き続いだ水田が認められる。

庄内式期には、長瀬川右岸において、東郷遺跡、正法寺遺跡、小阪合遺跡、矢作遺跡、中田遺跡、弓削遺跡の「中田遺跡群」、長瀬川左岸で久宝寺遺跡、加美遺跡という大規模集落が認められる。また大竹西遺跡や池島・福万寺遺跡でも集落域が認められる。大竹西遺跡では弥生時代後期後半から当該期にかけての鋳造鉄剣が出土しており、特筆される。これらの集落は古墳時代前期前半（布留式期前半）まで継続するが、後半には衰退し、小規模集落が点在する状況となる。

古墳の動向としては、古墳時代前期中葉から、生駒西麓に向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳、中ノ谷古墳をへて中期に心合寺山古墳、鏡塚古墳が築造される。平野部では萱振1号墳などの小型方墳もみられる。

古墳時代中期後半には、横穴式石室をもつ前方後円墳である郡川西塚古墳、郡川東塚古墳がみられ、また生駒山西麓には段上・植附古墳群がみられる。

古墳時代後期から終末期にかけては、生駒山西麓に山畠古墳群、花草山古墳群、五里山古墳群、六万寺古墳群、高安千塚古墳群が築造され、高安山山頂付近には高安山古墳群が築造される。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、高野街道沿いに河内寺、心合寺、高麗寺、教興寺などの寺院が建立される。また667年には高安山山頂に古代山城である高安城が築かれる。

平安時代には、付近は摂関家の所領である玉櫛荘の範囲に含まれる。1137（保延3）年に宇治平等院建立に伴って寄進され、以後は平等院領となつた。向山瓦窯跡では平等院の瓦を焼成している。

条里地割は、7世紀代にその施工の可能性について指摘されているが、表層条里地割と一致する地割の施工は、池島・福万寺遺跡の調査によって確認された10世紀中頃のものが確実なもので、「玉櫛荘」の開発と関連するものと考えられ、恩智川の整備もこのころと考えられている。

鎌倉時代には、当遺跡周辺は、水走氏の支配下にあったとされている。当該期の集落遺構は大竹遺跡、花岡山遺跡、池島・福万寺遺跡、花岡山遺跡で確認されており、後述する水越遺跡の過去の調査でも確認されている。

中世城館跡としては、若江遺跡において若江城に関連する遺構が確認されている他は、八尾城や恩智城などが知られるが、詳細は不明なものが多い。

第3節 太田川遺跡と水越遺跡における既往の調査

(1) 太田川遺跡（第3図）

太田川遺跡は、八尾市の北東部に位置しており、現在の大竹1・3・4丁目、水越1・3・4丁目、西高安1・2丁目の、南北約500m、東西850mの範囲である。生駒山西麓の扇状地先端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域である（（公財）八尾市文化財調査研究会2015）。

本遺跡は、昭和15（1940）年の東高野街道改修工事の際に、滑石製勾玉、弓筈状木製品を含む土層が確認されたことにより認識されることとなった（八尾市史編集委員会1988）。昭和56（1981）年には地下電力ケーブル工事に伴う立会において古墳時代の包含層を、また昭和57（1982）年には八尾市教育委員会による発掘調査が行われ、弥生後期の遺構、遺物が検出された（（財）八尾市文化財調査研究会1983a、1983b）。

これまでに財団法人八尾市文化財調査研究会によって、数次の調査が行われている。このうち、国道170号線に近い遺跡西部では、OGT93-1次調査（平成元年度）の1区において奈良時代の溝、古墳時代後期の溝、弥生時代後期～庄内式期の溝を検出している。特に古墳時代の溝からは滑石製有孔石製品の未成品が出土しており、周辺における玉造関連遺跡（水越遺跡、池島・福万寺遺跡）との関係が注目される（（財）八尾市文化財調査研究会1994）。また太田川2005-473調査地（平成17年度）では、古墳時代中期の遺構面が確認されており、輪羽口、金床石、砥石など鍛冶関連遺物が出土しているほか、弥生時代後期の包含層が確認されている（八尾市教育委員会2007）。

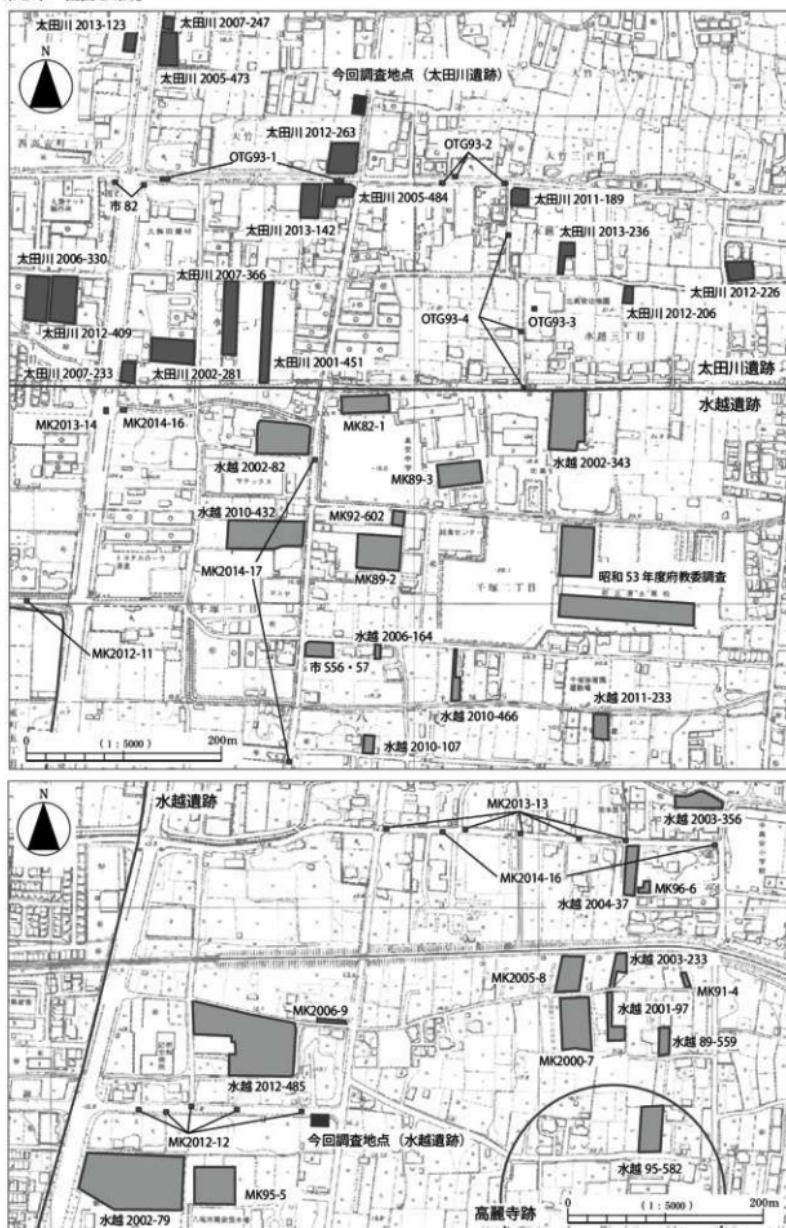
遺跡東部である旧国道170号線の東側では、OGT93-1次調査の2区において縄文時代晩期の包含層が確認され、滋賀里式の深鉢が出土しているほか、OGT2013-2次、3次調査（平成25年度）では、縄文時代晩期や、弥生時代後期～古墳時代にかけての遺物包含層が（（公財）八尾市文化財調査研究会2014）、またOGT-2014-4次調査（平成26年度）では、縄文時代後期前葉の中津式に比定される深鉢のほか、弥生時代後期後半や古墳時代中期にかけての遺構、遺物が検出されている（（公財）八尾市文化財調査研究会2015）。

今回の調査区を含む旧国道170号線（東高野街道）沿いでは、太田川2005-484調査地（平成17年度）において、弥生時代後期～古墳時代初頭の土壤化層が確認されている（八尾市教育委員会2007）。この土壤化層は、太田川2015-142調査地（平成25年度）で確認された弥生時代後期の遺物包含層と対応しており（八尾市教育委員会2014）、また今回調査区の南に隣接する太田川2012-263調査地（平成24年度）においても、対応する弥生時代後期の土壤化層と当該期の土坑を確認している（八尾市教育委員会2013）。今回の調査地でも当該期の遺構等の検出が予測された。

(2) 水越遺跡（第3図）

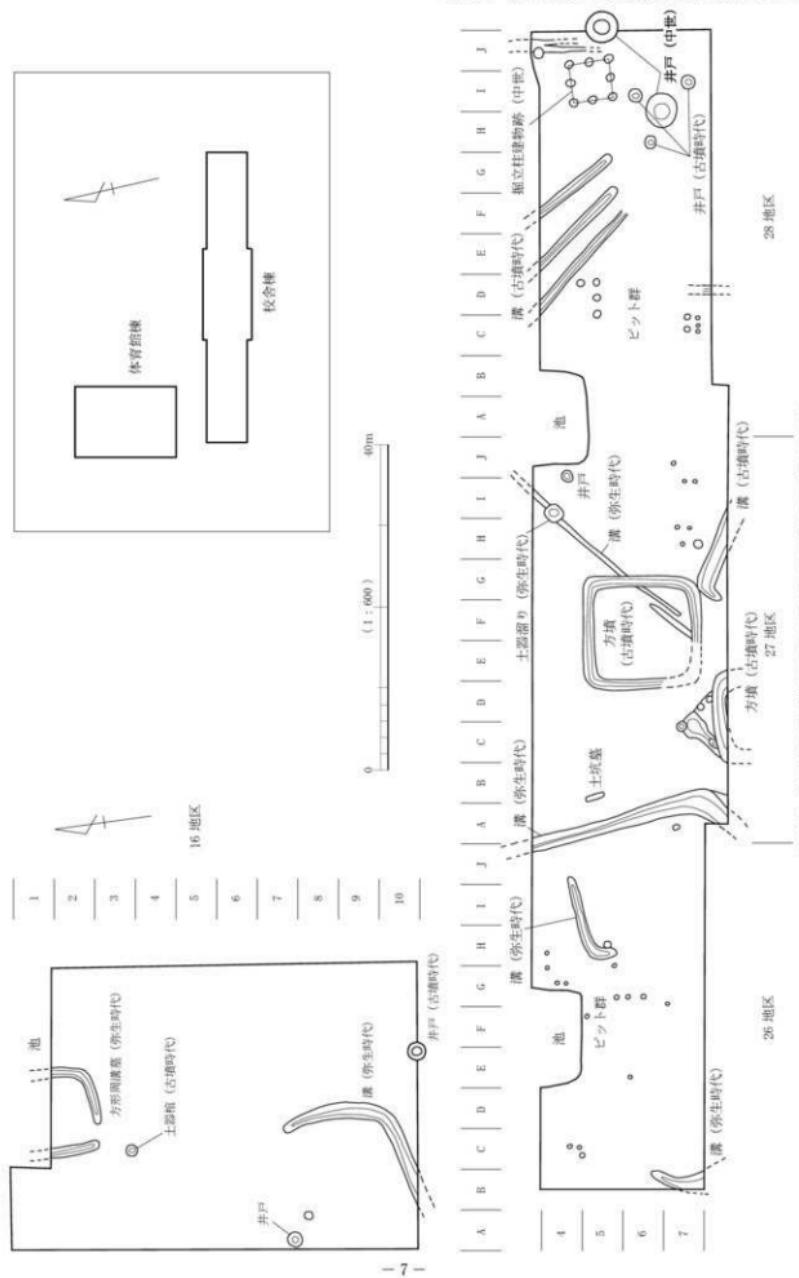
水越遺跡は、八尾市水越、千塚、大窪、服部川一帯の約1.2km四方の範囲に広がり、生駒山西麓の扇状地上に立地している。古く大正9（1920）年に石礫が採取され、昭和5（1916）年には、勾玉研磨用の筋砥石、滑石製小玉や管玉未成品などが採取されたほか、昭和9（1920）年に旧国道170号線の改修に際して、弥生土器が出土している（（財）八尾市文化財調査研究会1989）。特に玉作関連遺物は、上記

第2章 位置と環境



第3図 太田川遺跡・水越遺跡における既往の調査地 (1/5,000)

第3節 太田川遺跡と水越遺跡における既往の調査



のように太田川遺跡など周辺遺跡でも確認されており、玉類の生産集落であることが指摘されている(原田ほか1976)。

本遺跡における本格的な発掘調査は、旧大阪府立清友高等学校の建設に伴い、大阪府教育委員会が昭和53年に実施したもので、校舎部分と体育館部分において行われた。その概要については、すでに旧清友高等学校における「紀要清友」において報告されている(吉岡1988)。ここではそれを踏まえて概要を記しておく(第4図)。

調査は5mメッシュによる地区割りによって行われ、体育館部分(16調査区)では調査区北部で弥生時代の方形周溝墓と庄内式期とみられる土器棺墓、南部で弥生時代後期後半の溝、古墳時代の井戸を検出している。校舎部分のうち26地区では西端部で弥生時代の溝、東半部で弥生時代中期の溝(方形周溝墓とみられる)、時期は不詳だがビット群を検出している。27地区では26地区との境で南北方向に走る、断面形がV字形を呈する溝を検出しており、最下層で弥生時代中期(Ⅱ様式)の土器が、中～上層では古墳時代中期の土師器や須恵器を検出している。また中央部と南端部では方墳の周溝が2基分検出されており、近接して検出された溝についても古墳の周溝である可能性がある。また方墳に切られる、弥生時代に属する北東～西南方向の溝が検出されており、そこから弥生時代中期の土器溜りが検出されている。28地区では北端で古墳時代に属する井戸、溝(中期～後期)の他に、中世(12世紀後半～13世紀前半頃)に属する井戸が2基、掘立柱建物跡1棟等が検出されている。

遺物としては、吉岡氏によって報告されているとおり(吉岡1988)、各時期の土器を中心として、銅鏡、鉄鏡や、滑石製管玉未製品など玉作関連遺物も出土している。

以上のように弥生時代～中世にかけて集落跡ないしは墓域が断続的に形成されていたことが明らかとなつておらず、調査地は長期にわたり比較的安定した地形環境であったようである。

それ以降においては、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会によって数次の調査が行われている。主な成果を列記すると、縄文時代では、MK89-2次調査で自然流路から中期の船元式の深鉢が検出されているほか((財)八尾市文化財調査研究会1997)、後期に属する土器片がMK89-3次調査において出土している((財)八尾市文化財調査研究会1997)。また95-582調査では中期末から後期中葉にかけての土坑等の遺構や遺物が出土している(八尾市教育委員会1997)。またMK2000-7次調査では晩期の土器埋納ビット((財)八尾市文化財調査研究会2001)が検出されている。

弥生時代では、MK89-2次調査において、中期の環濠と考えられる溝、井戸、土坑を検出しているほか((財)八尾市文化財調査研究会1997)、MK2012-11次調査で中期後半の土坑が検出されている((財)八尾市文化財調査研究会2013)。弥生時代後期後半になると遺構が確認される調査地点が増加し、MK89-3、MK95-5、MK96-6、MK2000-7、MK2005-8、MK2012-11次等で認められるようになる((財)八尾市文化財調査研究会2011等)。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、MK95-5次調査地点で竪穴建物や掘立柱建物、井戸、溝等が検出されている((財)八尾市文化財調査研究会2006)。

奈良時代～平安時代では、MK2006-9次調査において、河川堆積物から須恵器、土師器の他に丸瓦や平瓦が出土しており、この調査地の南東に推定されている郡川庵寺(高麗寺跡)との関連が注目される((財)八尾市文化財調査研究会2007)。

調査区北側の東西道路で行われたMK2012-12次調査の5区は、今回調査区に隣接する地点であるが、

扇状地性堆積物、河川堆積物が確認されており、それらの間に土壤化層が認められるが、明確な遺構を伴わなかった（（財）八尾市文化財調査研究会2014）。また本調査区の南西約100mに位置するKM95-5次調査地点では、上記のとおり弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落跡が検出されており、調査区の位置関係から、本調査区は当該期の集落北辺部ないしはその縁辺部である可能性が想定されたが、次章で報告するとおり、当該期の遺構は確認されず、古墳時代後期の水田面や弥生時代に属する自然流路が検出された。

【参考文献】

- 河角龍典 1999 「池島・福万寺遺跡およびその周辺の地形」『研究調査報告』第2集 （財）大阪府文化財センター
- （公財）大阪府文化財センター 2012 「池島・福満寺遺跡・15 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅱ期地区09-2調査区）」（財）大阪府文化財センター調査報告書230集
- （公財）八尾市文化財調査研究会 2014 「（公財）八尾市文化財調査研究会報告143」
- （公財）八尾市文化財調査研究会 2015 「下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」公益財團法人八尾市文化財調査研究会報告 146
- （財）大阪府文化財センター 2002 「池島・福満寺遺跡2 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書」（財）大阪府文化財センター調査報告書79集
- （財）大阪府文化財センター 2007 「池島・福万寺遺跡3 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅰ期地区）」（財）大阪府文化財センター調査報告書第158集
- （財）八尾市文化財調査研究会 1983a 「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和56・57年度」財團法人八尾市文化財調査研究会 報告3
- （財）八尾市文化財調査研究会 1983b 「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和56・57年度」財團法人八尾市文化財調査研究会 報告3
- （財）八尾市文化財調査研究会 1989 「I 水越遺跡（第1次調査）」（財）八尾市文化財調査研究会報告23]
- （財）八尾市文化財調査研究会 1992 「VI水越遺跡第4次調査（MK91-24）」（財）八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」（財）八尾市文化財調査研究会報告34
- （財）八尾市文化財調査研究会 1994 「III太田川遺跡第1次調査（OTG93-1）」財團法人八尾市文化財調査研究会報告42]
- （財）八尾市文化財調査研究会 1997a 「V水越遺跡第2次調査（MK89-2）」（財）八尾市文化財調査研究会報告57】
- （財）八尾市文化財調査研究会 1997b 「VI水越遺跡第3次調査（MK89-3）」（財）八尾市文化財調査研究会報告57】
- （財）八尾市文化財調査研究会 1998 「XVIII水越遺跡第6次調査（MK96-6）」（財）八尾市文化財調査研究会報告60】
- （財）八尾市文化財調査研究会 2007 「V水越遺跡第9次調査（MK2006-9）」（財）八尾市文化財調査研究会報告99】
- （財）八尾市文化財調査研究会 2007 「大竹西遺跡第1次発掘調査報告書-大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う-」（財）八尾市文化財調査研究会報告94
- （財）八尾市文化財調査研究会 2011a 「III水越遺跡第10次調査（MK2009-10）」（財）八尾市文化財調査研究会報告134】
- （財）八尾市文化財調査研究会 2011b 「VI水越遺跡第8次調査（MK2005-8）」（財）八尾市文化財調査研究会報告135】
- （財）八尾市文化財調査研究会 2013 「XII水越遺跡第11次調査（MK2012-11）」（財）八尾市文化財調査研究会報告141】

- (財) 八尾市文化財調査研究会 2014a「XIV 水越遺跡第12次調査 (MK2012-12)」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告143』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2014b「XV 水越遺跡第13次調査 (MK2012-13)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告143』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2014c「XVI 水越遺跡第14次調査 (MK2012-14)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告143』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2014d「XVII 水越遺跡第15次調査 (MK2012-15)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告143』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2015a「XX I 水越遺跡第16次調査 (MK2014-16)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告146』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2015b「XX II 水越遺跡第18次調査 (MK2014-18)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告146』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2015c「VI 水越遺跡第17次調査 (MK2014-17)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告147』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2006 「II 水越遺跡第5次調査 (MK95-5)』『(財) 八尾市文化財調査研究会報告92』
- 原田修ほか 1976 「特輯 清原得嘉所蔵考古資料図録」『大阪文化誌』季刊第2巻第2号 (財) 大阪府文化財センター
- 八尾市教育委員会 1997 「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告36』
- 八尾市教育委員会 2007 「八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告55』
- 八尾市教育委員会 2013 「八尾市内遺跡平成24年度発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告70』
- 八尾市教育委員会 2014 「八尾市内遺跡平成25年度発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告72』
- 八尾市教育委員会・(財) 八尾市文化財調査研究会 2001 「II 水越遺跡 (第7次調査)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2 平成12年度』
- 八尾市史編集委員会 1988 「増補版 八尾市史 (前近代) 本文編」
- 吉岡 哲 1988 「河内の玉作遺跡-本校敷地周辺の遺跡とその性格-」『紀要清友』第1号 大阪府立清友高等学校

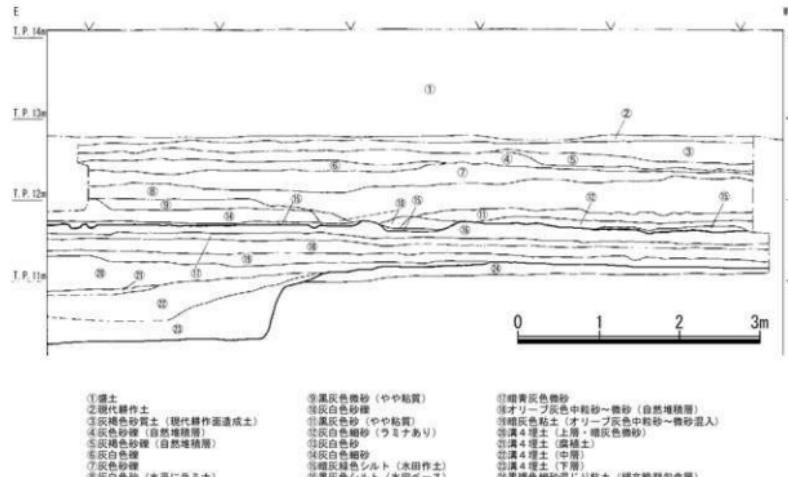
第3章 水越遺跡の調査成果

第1節 基本層序と遺構面（第3図）

今回の発掘調査においては、現地表面下約3.0m、一部3.8mまで掘り下げ、遺構・遺物の検出と土層の堆積状況の確認をおこなった。

調査地点は扇状地のなかを東から西に向かう大きな谷地形のなかにあたっており、多くの堆積層は流水による、礫砂、シルトなどの堆積である。しかし、土層を観察すると、①近世以降の耕地面、②古墳時代後期の水田面、③欄文時代晚期の遺物包含層上面の三つの安定した面が確認された。

近世以降の耕作地 現地表面は、TP+14.1mを測る。近年施された厚さ約1.3mの盛土の上面に当たる。盛土が施される以前、近年まで利用されていた耕作面（耕作面造成土層である③灰褐色砂質土の上面）は、TP+12.8m前後を測る。この耕作面の造成に当たって土砂を搬入して平坦な面を作っている。本地点が耕作地として開発された時期を出土遺物などで特定することはできないが、1885年（明治18）年に大日本帝国陸地測量部の測量によって作成された仮製図（2万分1）をみると、本調査区の東側を南北に通る東高野街道（旧国道170号）の東側は畑、西側は水田が描かれている。このことから扇状地は畑、沖積地は水田とされていたことがわかる。いずれにしても本調査区付近の一帯は近世のある時点では耕作地として開発されていたことは間違いない。本調査区の耕作面も同様に近世のある時点以降に盛土を施して造成されたものと推定される。



第5図 調査区断面図

耕作面造成土層の下層には、厚さ約1mの流水堆積層がみられる(④～⑬)。砂、砾、シルトなどで構成されており、多くの土層にラミナも観察された。これらの土層からは瓦器や土師器の小片が出土しており、中世以降の流水堆積層と考えられる。

古墳時代後期の水田面 TP+11.70m前後の位置で古墳時代後期の水田面が検出された。黒灰色シルト(⑯)を水田面のベースとしている。畦畔は黒灰色シルトを掻き寄せて造る。暗灰緑色シルト(⑮)を水田作土としている。

黒灰色シルトの下層には基本的に3層の砂・粘土層(⑰⑱⑲)が堆積していた。いずれも流水による堆積土である。この土層からは弥生時代後期の土器片が出土している。

縄文時代晩期の遺物包含層上面 その下層に厚さ10～20cmを測る黒褐色細砂混じり粘土(⑳)がみられた。ここには縄文時代晩期の土器片を多数包含していた。上面から溝4が切り込まれていた。本層の上面はTP+11.20mを測る。

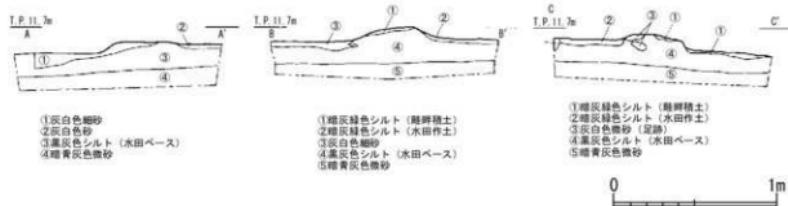
本層の下層も流水による疊砂、シルト、粘質土などの堆積であり、遺物は検出されなかった。

第2節 検出された遺構

古墳時代後期の水田跡(第6・7図、図版1・2) 古墳時代後期の遺構面は、全面に水田跡で覆われていた。区画全体が明らかになった水田跡1枚(水田跡4)と区画の一部が確認された水田跡5枚、



第6図 水田跡平面図



第7図 水田畦畔断面図

合計6枚の水田跡が検出された。黒灰色シルトをベースにして畦畔を積土により作る。暗灰緑色シルトを水田作土とする。

水田跡は地形に合わせて東から西に列をなして連続して造られている。相互に約5cmのレベル差をもつ水田跡は、東から西へ、水田跡3⇒水田跡4⇒水田跡5の順に用排水の流れが確認できる。それぞれを限る畦畔からは水口が検出されている。また水田跡1⇒水田跡2への水の流れもやはり水田面のレベル差から想定できる。各水田跡は高さ数cmの畦畔で囲まれるが、水の流れを受ける南北方向の畦畔が東西方向の畦畔に比べ幅広く造られている。

水田跡1は、区画の西南部分を検出。東西現在長約3.8m、南北現在長約2.6mを測る。水田面の標高はTP+11.61~64mを測る。水田面を囲む畦畔は下幅30~40cm、上幅15~20cm、高さ10cm前後を測る。

水田跡2は、区画の南端部分を検出した。東西長約4.0m、南北検出長約0.8mを測る。水田面の標高はTP+11.55m前後を測る。水田面を囲む畦畔は下幅30~40cm、上幅15~20cm、高さ7cm前後を測る。水田1との比高差は6~9cmである。

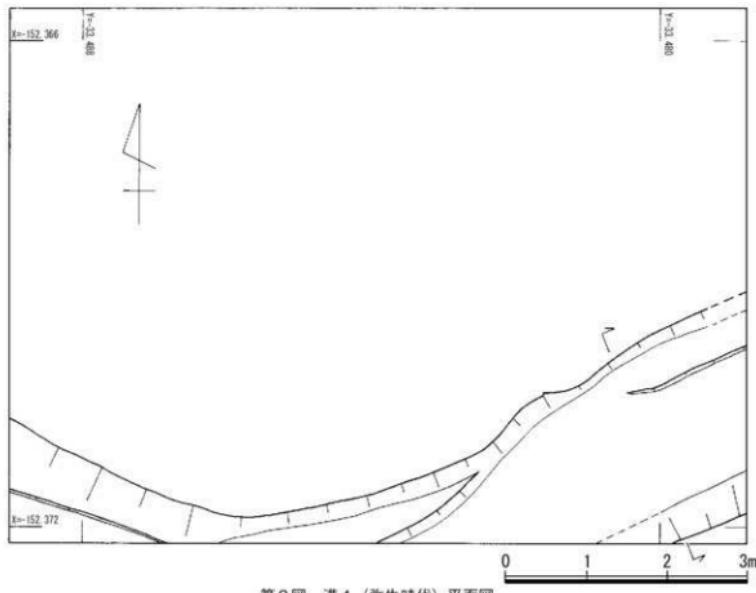
水田跡3は、区画の西部分を検出。東西検出長約3.6m、南長約3.6mを測る。水田面の標高はTP+11.71m前後を測る。水田面を囲む畦畔は下幅30~60cm、上幅20~40cm、高さ4~7cm前後を測る。

水田跡4は、唯一区画全体を検出したもので、東西長約4.0m、南北長約4.0mを測る。面積は16m²前後である。水田面の標高はTP+11.67m前後を測る。水田面を囲む畦畔は下幅30~60cm、上幅15~40cm、高さ7cm前後を測る。水田3との比高差は4~5cmである。水田跡3との間の畦畔に上幅80cm前後、下幅60cm前後の水口を設けている。

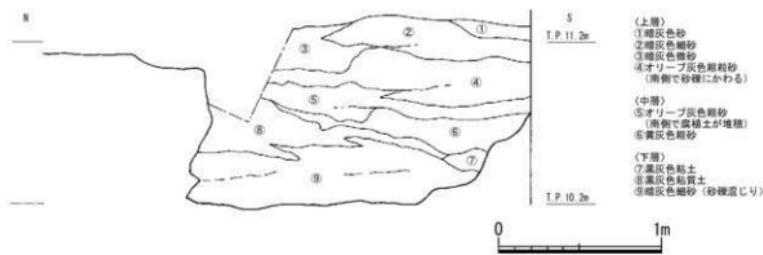
水田跡5は、区画の東端部分を検出した。東西検出長約0.8m、南北長約5.0mを測る。水田面の標高はTP+11.55m前後を測る。水田面を囲む畦畔は下幅30~40cm、上幅20~30cm、高さ10cm前後を測る。水田3との比高差は10cm前後である。水田跡4との間の畦畔に上幅20cm、下幅15cmの水口を設けている。

水田跡6は、区画の東北部部分を検出した。東西検出長約5.0m、南北検出長約1.2mを測る。水田面の標高差はTP+11.55m前後を測る。水田面を囲む畦畔は下幅40cm前後、上幅20cm前後、高さ6cm前後を測る。

今回の調査で検出した水田跡は、一辺4~5m程度の小規模なもので、畦畔によっておおむね方形に区画して東から西に傾斜する地形を利用して用排水を行っている。調査区内で検出された水田跡は、列を成してならぶ水田群の東西列ごと完結した水の流れをもっている。



第8図 溝4（弥生時代）平面図

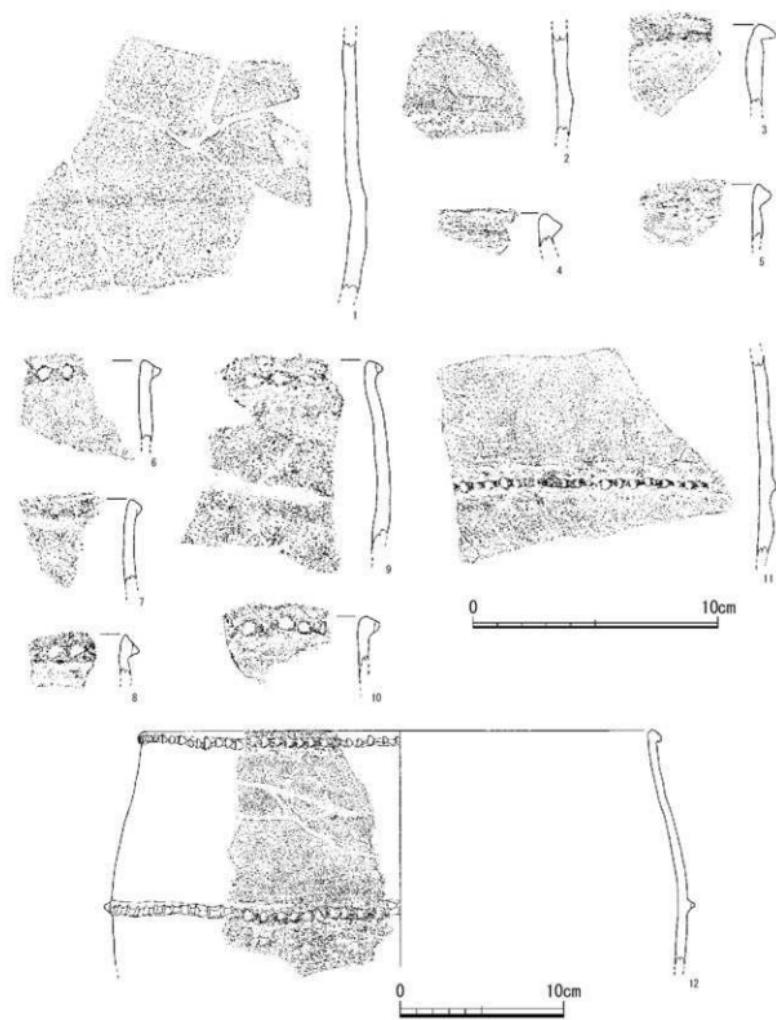


第9図 溝4断面図断面図

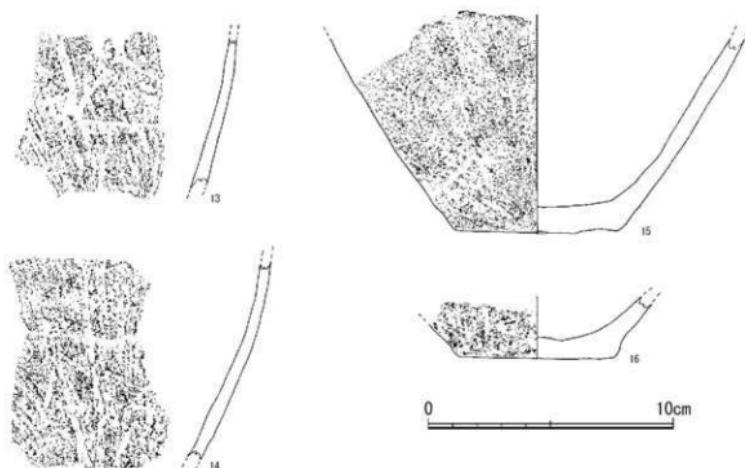
水田面上から須恵器の蓋環の环部(17)が出土しており、6世紀後半の時期がえられる。

弥生時代の溝（第8・9図、図版2・3）溝4は調査区の南辺に沿って検出された。繩文時代晩期の土器片を多く包含する黒褐色細砂混じり粘土層の上面から切り込む。東から弧を描いて西へ流れる。幅は2.8m以上、深さ約1.1mを測る。流水堆積による砂疊、シルト、粘土を埋土としている。下層は細砂層を主体として比較的緩やかな流れによって形成される。中層は粘土や腐植土層が堆積しており滞水する時期の、上層は砂層が多く比較的強い流れの時期の所産と推定される。

溝4の埋土の下層からは弥生土器の小片が出土しており、この遺構の時期の上限と理解した。調査区が立地する谷地形のなかを流れる水を管理するために造られたものと考えられる。



第10図 繩文晩期土器実測図（1）



第11図 繩文晩期土器実測図（2）

第3節 出土した遺物

縄文時代の遺物（第10・11図、図版4・5） 縄文時代の遺物は、黒褐色細緻混り粘土層と溝4から若干の縄文土器が出土した。

1と2は深鉢体部片で、胴部と頭部を画する変化部にあたる。両者とも緩やかに屈曲して段をなし、頭部はほぼまっすぐに上方へ伸びている。1、2とも胴部外面は煤の付着が著しい。頭部外面と内面はナデ仕上げ。3から5は突帯を有する口縁部片。いずれも粘土紐を口縁端部に接して貼り付け、断面三角形に成形している。突帯には刻みを施していない。内外面ともナデで仕上げている。小片のため傾きは不明。6～10は突帯を有する突帯文土器である。突帯は口縁端部に接して貼り付け、断面三角形に成形しているのは3～5と変わらない。いずれもD字形の刻みを施す。傾きは不明だが、7は外反気味に、9は内湾気味に上方へ立ち上がる。11は突帯を有する体部片。頭部外面は横方向のナデで、ハケ目状の軽い痕跡が残る。胴部外面には左上方に搔き上げた擦痕がわずかに残る。突帯の幅は約5mmと狭く、細かなD字形刻みを施している。12は口縁部と体部に突帯を有する、二条突帯の深鉢である。復元口径31cm、体部突帯付近に最大径がある。内面と頭部外面はナデ仕上げ、胴部突帯直下は横方向のケズリ整形である。刻みはD字形。胴部外面には煤が付着している。

13・14は体部中位から下半の破片である。両者とも外面は原体不詳の条痕調整で、煤が付着する。内面は丁寧なナデ仕上げである。15・16は底部片。15は底径6.6cmの平底。16は底径6.4cm。ともに体部外面は13・14と同様の調整である。

1・5～7・9・11・12が黒褐色細緻混り粘土層、他が同層を切って流れる溝4の中層から出土した。1と2は口縁部に一条の突帯を有する深鉢かも知れない。3～10の突帯文土器は、突帯の刻みの有無は

あるが、いずれも口縁端部と一体に整形し断面三角形を呈するもので、長原式である。12は船橋式である。13~16は船橋式ないし長原式の体部下半～底部にあたるものと考えられる。層準と土器形式は整合しておらず、単純包含層ではない。

その他の出土遺物（第12図、図版5） 17は須恵器蓋杯の杯部の破片である。六世紀後半の所産。古墳時代後期の水田面の直上の砂層から出土した。この資料によって水田面の時期を想定した。

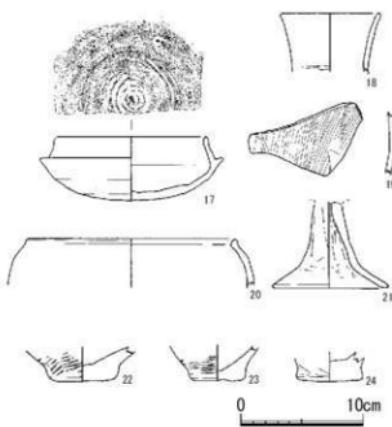
18~21は、土師器の破片である。18は壺の口縁部破片、19は壺の体部破片、20は鉢の口縁部破片、21は高杯の脚部破片である。近世以降の耕作地造成土の下層、古墳時代後期の水田面までの流水堆積による砂・シルト層から出土した。

22~23は、外面に叩き痕跡の残る弥生土器の甕の底部である。古墳時代後期の水田跡のベース層の下層、縄文晩期土器を包含する層の間に堆積した砂・シルト層から出土した。

24は竹製の矢柄の一部である（図版表紙）。施された漆の被膜の一部が遺存する。古墳時代後期の水田面を覆う流水堆積によるシルト・砂層から出土。2片に分かれが、接合はしない。

24-a（図版表紙写真・上）は現在長約10.5cm、太さ0.5~0.7cmを測る。もっとも細い端部（写真的右端）に竹の節があり、その先は割りこみを入れ二股に分かれれる。矢柄の先端と推定される。

24-b（図版表紙写真・下）は現在長約12.8cm、太さ0.7cmを測る。中央部分に朱色の漆被膜が5巻分ほど残る。軸部に巻いた桜の樹皮の上から漆を塗布したものであるが、樹皮は遺存しない。



第12図 その他の土器実測図

第4章 太田川遺跡の調査成果

太田川遺跡は、高安山の西麓の緩やかに斜面する扇状地の先端部に所在する遺跡である。これまで小規模な調査が多く地点で実施されているが、その全貌は明らかではない。

遺跡の推定範囲内は起伏に富んでおり、高安山に刻まれた東西方向の谷地形がいくつも走り、地点ごとで遺跡のあり方に大きなちがいがある。

第1節 調査区の立地と基本層序（第13図）

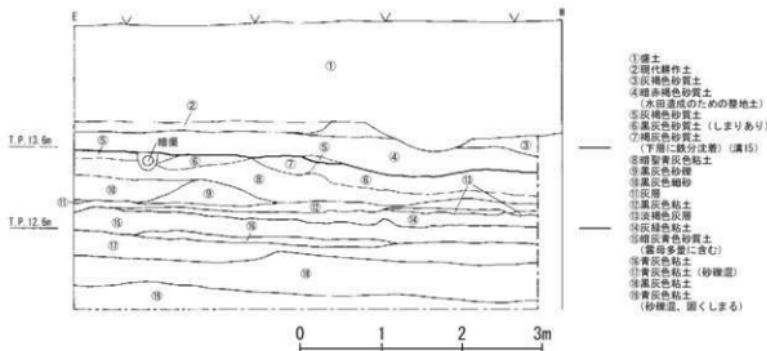
調査地点は扇状地のなかを東から西に向かう大きな谷地形のなかにあたっており、多くの堆積層は流水による、礫砂、シルトなどの堆積である。現地表面下約3.5mまで土層の堆積状況を確認した。

現地表面は、TP+15.1mを測る。ここには近年、厚さ約1.2mの盛土が施されている。盛土以前の近代の耕作土（②）の上面は、TP+13.90前後を測る。耕作面の造成に当たって土砂（⑥暗赤褐色砂質土）を搬入して平坦な面を作っている。この造成土を除去すると土管を繋いで設置した暗渠が検出された。暗渠はおおむね東南東から西北西に走っている。近代のものである。

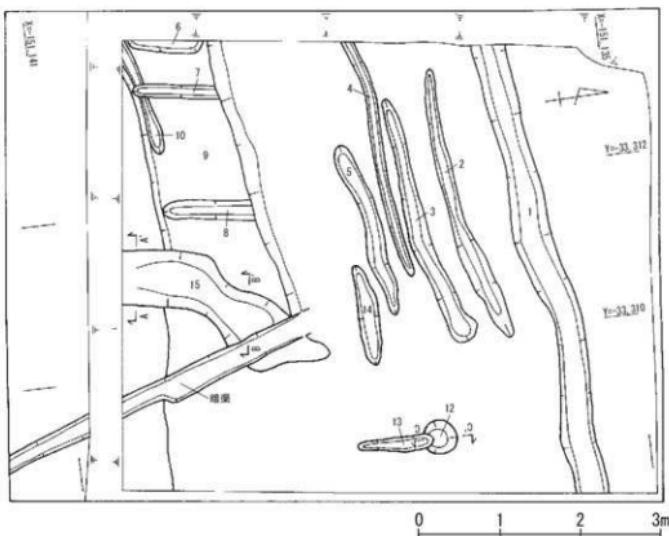
暗渠を検出した面はTP+13.30～60mを測るが、ここからは中世と古墳時代後期の遺構が重複して検出された。

耕作面造成土層の下層には、厚さ50cm前後の流水堆積層がみられる（⑤⑥、⑧～⑩）。砂、礫、シルトなどで構成されており、多くの土層にラミナも観察された。これらの土層からは瓦器や土師器などの小片が出土したのみである。

さらに古墳時代後期の遺構面下約2mまで掘削し、土層の状況などを確認した。基本的に流水堆積による砂、シルト、粘土で構成されていた（⑪～⑯）。遺構・遺物は検出されなかった。



第13図 調査区断面図



第14図 遺構面平面図



第15図 溝断面図

第2節 検出された遺構（第14・15図・図版6・7）

遺構面は、⑤、⑦層上面のT.P.+13.3～13.6m前後で検出された（第14図）。

調査区の南部で古墳時代後期に比定される溝15が確認された。幅60～80cm、深さ約20cmを測り、2.4m前後の長さで検出した。南北方向の溝で若干屈曲している。褐灰色砂質シルト、黒灰色砂質シルトを埋土とする（第15図）。この溝の北端部付近から須恵器壺の上半部の破片が出土した（第16図）。6世紀のものである。

同一の遺構面の全域から中世の方向をそろえる東南東から西北西、南北方向の耕作溝を検出した。

溝1は、幅約50cm、深さ約10cmを測る。東西側共に調査区外に伸びており、検出長は約5.7mである。埋土は、青灰色細砂混粘土である。

溝2は、幅約20～30cm、深さ約5cm、全長約3.5mを測る。埋土は、灰黄褐色細砂混シルトである。

溝3は、幅約20～30cm、深さ約5cm、全長約3.2mを測る。埋土は、灰黄褐色細砂混シルトである。

溝4は、幅約10cm、深さ約5cmを測る。西側は調査区外に伸びており、検出長は約3mである。埋土は、灰黄褐色細砂混シルトである。

溝10は、落込み9を切っており、幅約10cm、深さ約5cmを測る。西側は調査区外に伸びており、検出長は約1.3mである。埋土は、灰褐色砂質シルトである。

溝14は、幅約20cm、深さ約5cm、全長約1.8mを測る。埋土は、灰黄褐色細砂混シルトである。

溝6、7、8、13は、ほぼ南北方向の溝である。6、7、8は落込み9を切っている。

溝6は、東側のみ検出したが幅約20cmを測ると思われる。深さ約5cm、全長約1mを測る。埋土は、灰褐色粘質シルトである。

溝7、8は、北側が攪乱されており、全容を明らかにできなかった、ともに幅約20cm、深さ約5cm、残存長約1mを測る。埋土は、灰褐色粘質シルトである。

溝13は、幅約20cm、深さ約5cm、全長約1mを測る。埋土は、灰黄色中砂混砂質シルトである。

Pitは一基検出されたのみである。建物等は復元できない。Pit12は、溝13に切られている。直径約40cm、深さ約30cmを測る。埋土は黒灰色粘土で底部から拳大の平らな石が検出された（第15図）。遺物は出土しなかった。

落込み9は非常に浅い落込みで、調査区東側はその痕跡しか認められなかった。幅約1m、深さ約5cm、検出長約3.5mを測る。埋土は、黒灰褐色砂質シルトである。土師器や瓦器の小片が出土したが細片のため図化できなかった。

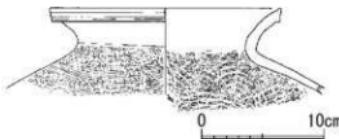
またこの遺構面で検出された土管を繋いで設置した暗渠は近代の耕作面にともなうものであるが、その方向は中世の耕作溝と90度振っている。同じ土地区画に規定されたものであろう。

第3節 出土した遺物（第16図・図版8）

25は須恵器甕の口縁部から体部上部の破片である（第16図）。内湾する面をもつ口縁部が特徴的である。体部内面に同心円叩き痕跡が残る。溝15上部で出土した。

他の出土した遺物は、古墳時代後期の遺構と中世の耕作溝が検出された遺構面を覆う砂やシルト層から出土した小片が大部分である。

32は須恵器蓋杯の杯部の口縁部の破片。35は須恵器甕の体部片。外面に細かい格子叩き、内面に同心円叩きを施す。26は土師器甕の体部片。茶褐色を呈す。27は土師質甕の取っ手。茶褐色を呈す。28は土師器甕の口縁部片。29は土師器の碗の底部片。30・31・36は中世の陶器片、33・34は瓦器の破片。



第16図 須恵器甕実測図

第5章　まとめ

水越遺跡と太田川遺跡は、いずれも高安山西麓の扇状地に展開する遺跡であり、縄文時代から中世近世にいたる多様な性格の遺構、遺物がこれまでに確認されている。今回の二カ所の調査地点は、1kmほど離れており、遺跡も異なり本末相互の関連性も薄い。しかしどちらの地点も扇状地の縁辺を走る旧東高野街道に隣接して設置されており、類似した立地条件をもつ。さらに扇状地に刻まれた谷地形の中に当たっていることから、土層の堆積状況や遺構面の状況など共通する面も多かった。

(1) 水越遺跡の調査

水越遺跡は、近世以降の耕作面の下層は、基本的にシルト、砂が堆積しており、流水によってもたらされたものである。そして流路の位置が移動し当該地が安定した時期には遺構面を形成する。

古墳時代後期の水田面は、東から西へ列をなして並ぶ小区画の水田跡の広がりの一部を検出した。水田跡相互のレベル差から水の流れの方向を確認し、地形に規定される水利の一部も復元することができた。一部の水田跡に水口が開いた状況で検出され、埋没したのが農間期であることを示す。

また水田面を覆う砂層から赤色の漆被膜が遺存していた矢柄の一部が出土した。古墳時代後期の遺物としては貴重なものであり、現在、保存処理作業を実施している。

弥生時代の遺構面では幅の広い溝が検出された。調査地点が立地する谷地形を流下する水を管理するために掘削されたものと推測される。溝の堆積状態は強い水の流れがあったことを示している。

弥生時代の遺構面は縄文時代晚期の土器を含む遺物包含層をベースとする。ここからは船橋式、長原式に属する土器片が多数出土した。周辺に当該時期の集落跡の存在が予想される。

以上のように水越遺跡における調査は、小規模な範囲のものであったにかかわらず、多くの遺構と遺物を検出することができた。

水越遺跡は、約1.2km四方の推定範囲をもつ巨大な遺跡であり、本書第2章で整理したように縄文中期以降、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の多様な遺構、遺物が確認されている。それぞれの時期の集落域、墓域、生産域が部分的ではあるが把握できる。

今回の調査では、扇状地の先端部の谷地形のなかの土地利用の変遷をある程度解明できた。また古墳時代後期に属する水田跡が検出されたことから、付近に同時期の集落域も想定される。さらにまとまって出土した縄文晚期の土器からはこちらも同時期の集落の存在が予想される。

(2) 太田川遺跡の調査

太田川遺跡においても、近世以降の耕作面の下層は、基本的にシルト、砂が堆積しており、流水によつてもたらされたものである。現地表面下約3.5mまで土層を確認したが、無遺物の堆積層が続く。しかし古墳時代以降の堆積量は多くなく、古墳時代後期の遺構と中世の耕作溝が同一遺構面で検出されている。また、近代の耕作面の下層に埋設された水位を下げるための土管を繋いだ暗渠も直上で検出された。この暗渠と中世の耕作溝はおおむね直角の角度をもって走る。このことは中世と近世の土地の利用は共

通する土地区画ももとづいていたことを示唆する。中世以降における開発の地形的な条件が継承されているのであろう。

太田川遺跡も水越遺跡と同様な立地条件をもつ巨大な遺跡である。縄文時代から古墳時代の遺構、遺物が検出されている。しかし断片的な調査が多く、その全貌を明らかにするには至っていない。

今回の調査は太田川遺跡の古墳後期の遺構を一部検出することができた。周辺でおこなわれている断片的な調査の成果を補完するものである。

水越遺跡、太田川遺跡における今回の発掘調査は、小規模な調査区であったにもかかわらず、扇状地に刻まれた谷地形のなかの利用の様相の一部を明らかにできた。集落域、墓域周辺の様相の変遷をうかがう重要な資料である。さらに縄文晚期の土器や古墳時代の矢柄など貴重な遺物の出土もあり、水越遺跡、太田川遺跡の考古資料に関する重要な情報を付加することができた。

報 告 書 抄 錄

大阪府埋蔵文化財調査報告2016-3

水越遺跡・太田川遺跡

-寝屋川流域下水道 枚岡河内南幹線（二）下水管渠築造工事に伴う発掘調査-

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成28年11月30日

印刷 株式会社 近畿印刷センター

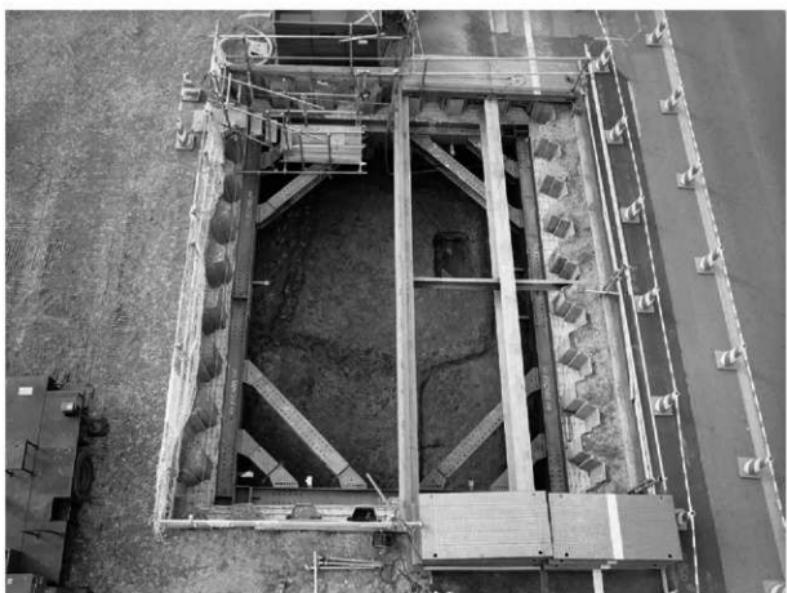
〒582-0001 柏原市本郷五丁目6番25号

図 版



矢柄（水越遺跡出土）

図版1 水越遺跡検出遺構1



調査区全景（東から）



水田跡（南東から）

図版2 水越遺跡検出遺構2

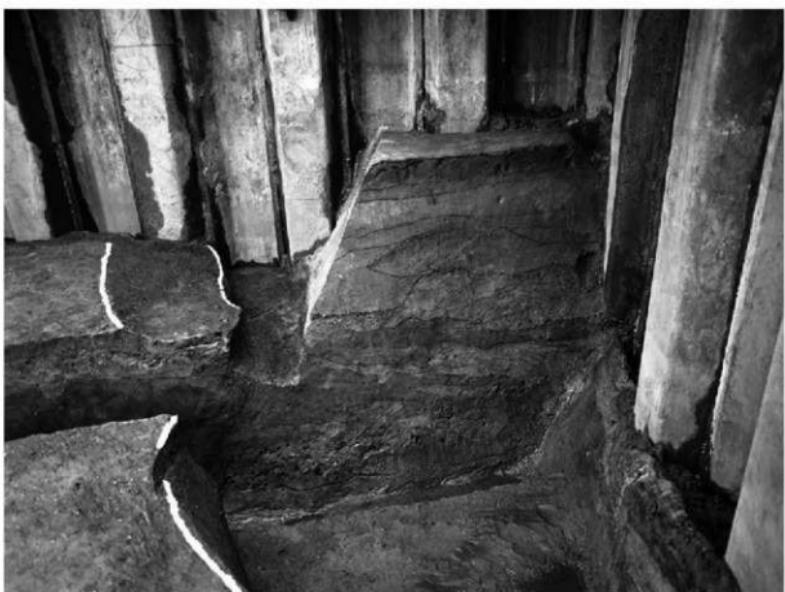


水田跡（北西から）



溝4（北西から）

図版3 水越遺跡検出遺構3

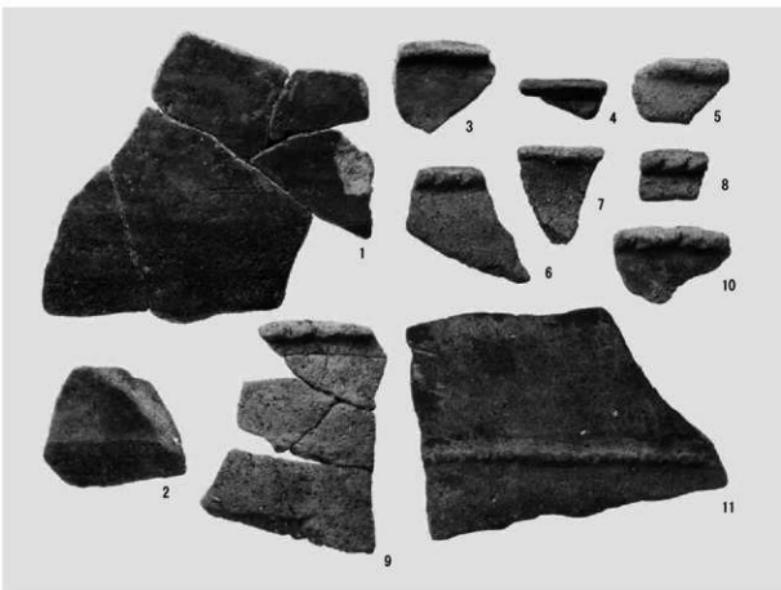


溝4断面（西から）

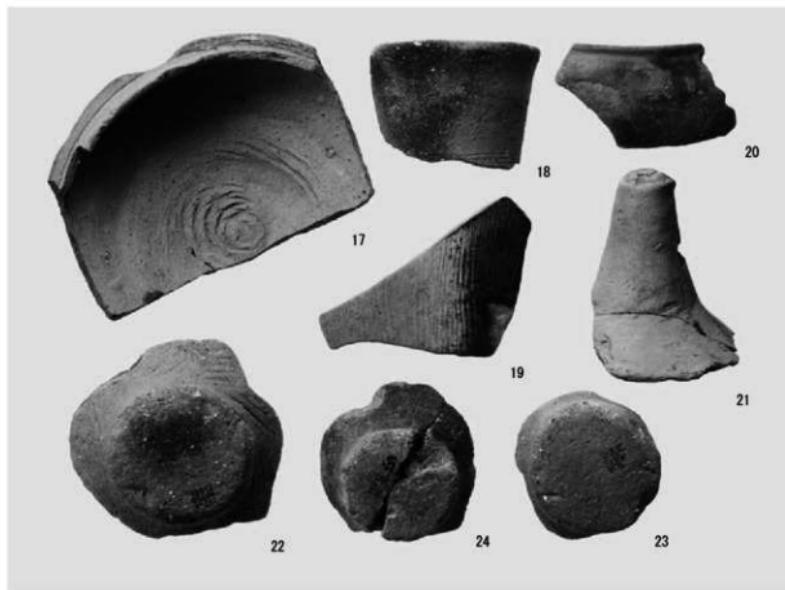
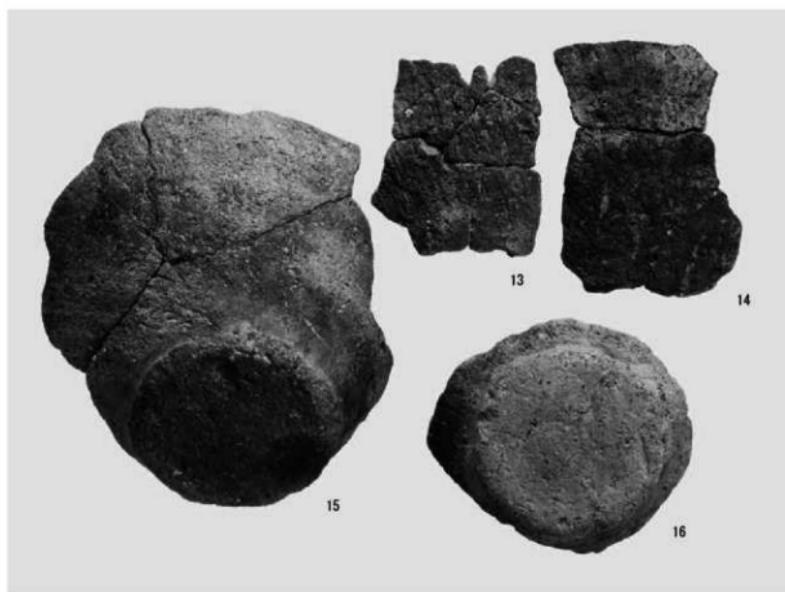


縄文時代後期遺物包含層以下の土層（北西から）

図版4 水越遺跡出土遺物1



圖版 5 水越遺跡出土遺物2



図版 6
太田川遺跡検出遺構 1



調査区全景（北より）



中世・古墳時代遺構面（西より）

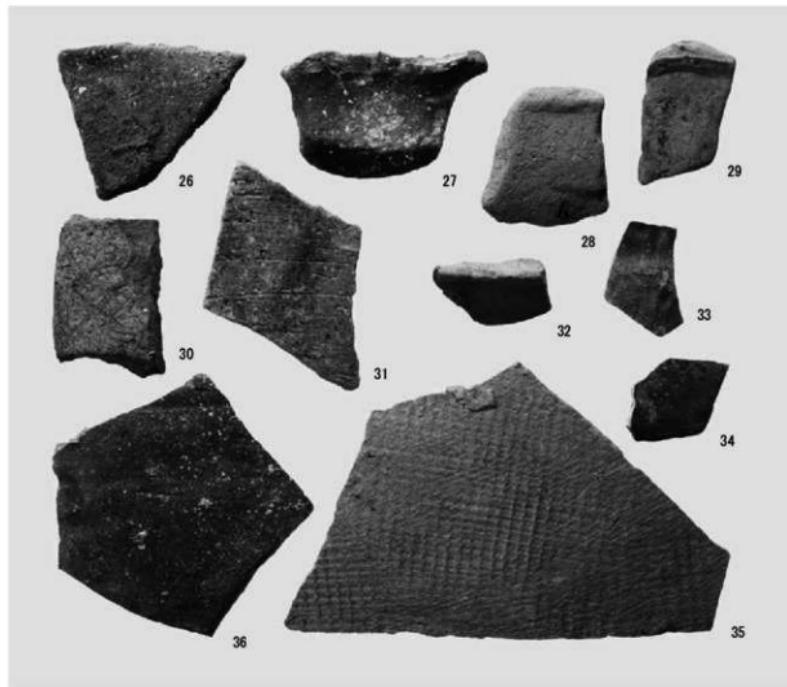


須恵器、甕出土状況

図版 8 太田川遺跡出土遺物



25



26

27

29

30

32

33

36

31

34

35